江戸時代の最新メディア

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えていただきます。

発表会

お稽古ごとの成果を披露 大人も子どもも大賑わい

「朝起きたら、まず寺子屋に行って机を並べて、三味線のお師匠さんのところで朝稽古でしょ。一度おうちに帰って朝ご飯を食べたら、踊りのお稽古をしてから寺子屋ね。寺子屋の後にお風呂に入ったら、今度はお琴のお師匠さんのところでまたお稽古よ。全部終わって、やっとおうちに帰っても、夜までその日のお稽古のおさらいだから、遊ぶのなんかこれっぽっち。まったく嫌になっちゃうわ」

これは江戸時代の小説『浮世風呂』に出てくる女の子のセリフ。江戸の子どもたちも、毎日習い事に忙しかったんですね。

今回ご紹介するのは、子どもたちが日々の稽古の成果を披露する発表会を描いた浮世絵です。ひな壇に並んで演奏をするのは、何年も稽古を重ねてきた先輩たち。床の間の前の上座では、新たに入門した子どもたちが尾頭付きの鯛の御膳を振舞われています（①）。そして座敷のあちらこちらで、三味線や太鼓の皮を温めたり（②）、衣装を着付けてもらったり（③）と、次の演目の準備も進んでいるようです。しかし一方で、座敷の大半を占める小さな子どもたちは、お菓子に夢中になっていたり（④）、浦島太郎の浮世絵を囲んで盛り上がっていたり（⑤）と、先輩たちの演奏などはそっちのけ。それなのに師匠や親が子どもたちを注意する様子はどこにも見られません。

室町時代に世阿弥が著した芸事の家伝書である『風姿花伝』には、「子どもが自然とし始めることの中にこそ、その子の芸があるのだから、稽古を始めたばかりの頃は子どものしたいようにさせておきなさい」「むやみに『よい』『悪い』と教えたり注意したりすると、子どもはやる気をなくして、上達しなくなる」とあります。

『風姿花伝』の存在が広く知られるようになったのは明治時代ですから、江戸の師匠たちはそんな世阿弥の言葉は知らないはず。それでも様々な浮世絵に描かれている芸事の師匠たちに、この「おおらかさ」が共通していることを考えると、多くの子どもたちを育て上げた芸事の師匠だからこそ分かる、大切なお稽古ごとの秘訣がそこにはあるのでしょう。皆さんはどう思われますか。

湯島音曲さらいの図

歌川国輝
安政5（1858）年

この浮世絵を描いた歌川国輝は、歌川派全盛期を築き上げた歌川国貞の門人。描かれているのは、湯島の有名な料理茶屋で行われた音曲稽古の発表会の様子です。座敷の外には上野・不忍池、遠くに富士山を望むことができます。「音曲」とは近世以前の三味線などの楽器を伴った大衆音楽・芸能のこと。

江戸ミニ知識

江戸の人々が楽しんでいたメロディー

江戸の子どもたちがお稽古をしていた音曲は、後に都節（みやこぶし）音階と名付けられた音階（≒音の並び）に基づくものだったとされています。みなさんもよく知る「さくら さくら」は、この音階で作られた曲として有名です。お手持ちの楽器で「ミ・ファ・ラ・シ・ド」だけを使って、適当に演奏してみると、その独特な「和」の雰囲気が手軽に味わえます。ぜひお子さまと試してみてくださいね。

日本の伝統的な子育て事情をお伝えすることで現代の子育てを応援します
KUMON × Happy-Note

ここで紹介した作品はウェブサイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」https://www.kumon-ukiyoe.jp でもご覧いただけます。【文・写真提供●公文教育研究会】